

幼兒教育の文化性 (三)

— 講習筆記 —

倉 橋 物 三

目 次

- 第一 序論
- 第二 道徳教育
- 第三 宗教教育
- 第四 藝術教育

その要素に就きまして第一の問題——この第一の問題は、大層考へ方の違つた意見が成立して來るのでありますて、要素が幾つもありますが、その要素の一つを此所に問題にする。その一つが、色々の非常に相反した様な意見が出て來る由來來歴を持つて居る要素でありますが、或考へ方では、宗教的生活態度に發達する一番根本の要素は恐怖である、斯う云

ふ考へ方であります。この恐怖ミ云ふ考へ方——總ての宗教は恐怖に發するミ斯う云ふ考へ方。これに對しまして私共の取つて居ります見解は、恐怖ミは大變に性質の違つて居ります所の、感謝ミ云ふ言葉を用ひて來るのであります。

【一、感謝】そこで、感謝ミ云ふのを、宗教心の最も主なる要素ミ私は考へる。その感謝ミ云ふ代りに恐怖ミ云ふ事を言ふ説が強くあるのであります。そこで説明の爲に、並べて考へて見た方がいゝと思ふのであります。恐怖ミ云ふ考は、これは多くの宗教の中に確かにある事であります。殊に宗教のもとであるミ解釋されて居ります自然宗教、自然界宗教、宗教的な感じを持つ本當の宗教は、さう云ふものでは御座いますまい。人類の始めて持ちました宗教ミ云ふものは、さう云ふ傾向を持つて居るので、その自然宗教ミ云ふものに就て考へて見ます。そこには恐怖ミ云ふ様な事が非常に大きな要素をなして居るらしく思はれます。例へば雷様を怖れる、或は大きな海を怖れる、大きな強い風を怖れる。これは、怖れるが故にそこに宗教心が、さう云ふ自然を對象として湧出て来るミ斯う考へられるのであります。又現に大人の生活の中に宗教的なるものが起りました時に、相當に恐怖ミ云ふ要素が強く働いて居る事を、自分達も否定し難いのであります。然しひらこの恐怖ミ云ふ事に就てよく考へて見ます。そこから又色々なお話を致しますが、先づ第一には、恐怖ミ云ふ様な事で、宗教的なるものが人類の發達の歴史の中に出で來ました事、これは確かであります。これを認めます。從て幼兒の心身の中にも、恐怖ミ云ふ様な意味から宗教の方になつて來る。その意味に於ての恐怖ミ云ふものが、相當意義を持つて居る事も認め得られます。唯宗教そのものゝ方から見まして、宗教が段々出來て來る方ぢやなく、吾々が宗教ミ云ふものを考へる上方から見て行きまして、何所迄、恐怖を要素として、高い大きな本當の宗教が出来るだらうかミ云ふ事を考へて見る、或は本當に偉い宗教ミ云ふものには、恐怖ミ云ふ事が果してそれ程強い、殆ど唯一の様な力を持つて居るものであらうかさうかミ云ふ事を、宗教の方から考へて見ます。子供の方には確かにさう云ふ事があり

ますし、人類の宗教の發生の中にもあります。今日は宗教と云ふ文化を問題に致して居る所でありますから、その高等なる宗教と云ふものには、恐怖と云ふ事がどんな風になつて居るだらうかと云ふ事を考へて見る所であります。さうしまするに云ふ事、次の考察が出て来る所思ひます。——話が少し、色々糺餘曲折して参りますので、お眠い方は今から眼が覺めて、段々お分り下さるかと思ひますが——今度一寸話が變りまして、一體恐怖と云ふ事は、人間の心理としてどう云ふ關係のものであらうか。恐れるに云ふ事と有難いに云ふ事とは、一體どう云ふ關係のものなんであらうか。斯う云ふ事を先に一つ考へて見る必要があります。

一寸考へますならば、恐れるに云ふ事と有難いに云ふ事は、これは全く別の事に相違ありません。夜、道を歩いて追剝が出る、恐ろしい、どう考へても感謝なんか云ふ事にはなりません。(笑聲)向ふから熊が出る来る。食ひ殺される、これも純粹なる恐怖であります。即ち恐怖と云ふものの、心理的特質は、本能に基くものでありますから、その本能の意味に於ての恐怖と云ふ事は、感謝と云ふ事と全く關係のない問題になります。

然し乍ら、茲に斯う云ふ事が考へられる所であります。恐怖の場合も感謝の場合も、心理的に調べて見まするに共通なるものぢやないか、共通なる性質がその中に發見されます。恐怖と感謝が同じものだと云ふのではありませぬけれども、そこに共通なるものがあるのであります。そこでその共通なるものを、何だらうかと調べて見ますと、自分と云ふものを小さく感じて居る所言ひますか、自分を縮少して居る所言ひますか……それが共通なる點であります。あゝびっくりした、膽つ玉が縮つた、膽つ玉許りではないのであります。體そのものが縮まるのであります。「何、怖いものか」と威丈高になりますが、側に寄つて見る所足がブル／＼震つて居るのであります。恐怖の時に教育が擴大するなんとか云ふ事は考へられない。恐れゝば恐れる程大になるなんとか云ふ事はありません。

感謝云ふ事も矢張りさうぢやないでせうか。感謝云ふ事は、向ふの相手に對して此方が反対であつては、感謝は出來ませぬ。中にはさう云ふ人もあります。「感謝してやる」と、えらく啖呵を切る人もありますが、然し感謝する云ふ時には小さくなる。ですから大抵の人に感謝が出來ない。結果は有難いと思つても、自己を萎縮する事が堪らんですから、くやしくつて感謝が出來ないのであります。感謝すべき筈だ云ふ事は分つて居つても、くやしくつて出來ないのであります。何をあんな奴に感謝しなければならぬか云ふ事は非常にくやしい。それは何所がくやしいか云へば、自己を縮少する事だ。そこが苦しいのであります。中にはさう云ふ事が平氣な人もあります。けれども普通の人間心理として、これは却々つらい事なのであります。だから感謝を餘り終始する人は、餘り高尚な人ではないと言はれます。終始感謝をして居る。下らぬ事でも何でも、どうも有難う、——橋の側の乞食——本當の心理はさうか知りませぬが、あすこ迄お辭儀すれば感謝だ。若し自己が縮少する云ふ心理そのものに就て平氣な人が感謝したから云つて、大した事ぢやありません。何でもないのである。「馬鹿にされる位の事は、私の方で降参する位の事は何でもないです。さうですか、感謝して置きますか」なんてさつさう出来る人は、さう云ふ感謝をされる方から言つたつて詰らないのであります。よくよく自己を縮少する事は嫌だが、然し感謝せざるを得ないから感謝してくれた時に、本當の感謝云ふ事になる譯でありますから、感謝云ふ事は、自己が縮少する事であります。ですから恐怖も感謝も、自己を縮少する云ふ事に於ては同じになります。

宗教は要するに、自我を縮少する事であります。一つ神様の所に話しに行つて交際つて來よう、なんて云ふ事はないのであります。どうもあの神様が、俺が來てくれなければ困る云ふから助けに行つてやう、お賽錢も少し分けて貰はう云ふ、高飛車な神様の兄貴、親分云ふ形で、宗教は成立しませぬ。日頃は何だと思つて居りますものでも、宗教になつ

て來れば此方が降參して居るのであります。此方が小さくなつて居るのであります。そこで、その意味に於きまして、恐怖と感謝とは必ずしも全く別個の心理性ではあります。心理性としては共通な所があるのであります。これを逆に申しますならば、恐怖も感謝も、相手を大きく見て居ります。それは相手を馬鹿にして、さうして感謝する云ふ事も、複雑なる人間心理の中にあります。あの野郎に感謝して置かうか云つた様な事もあります。あの御主人には本當に御恩になつたけれども、あの先代の亡くなつた後のやくざな御當主は、俺が助けてやらなければ生きて行けない奴だけれども感謝して置かうか、云つた様な事もあるのであります。けれどもこれ等は非常に複雑な事であります。兎に角相手云ふものを非常に大きく見て居ります。そこで、自分の自分を小さくする事も、相手を大きく見る事に於ても、共通な心理が、或時は感謝になり、或時は恐怖になる。これはどこから違つて來るか云ふ事が問題になつて來ます。中には、感謝云ふ心に於て、實は恐怖しかして居ない事もあります。

子供なんか、私共の側に来て感謝する。感謝する云ふけれども、心の中は純粹の恐怖に他ならぬ。何だかじろく私共を見乍ら、怖さうな顔をして「この位感謝すれば罰を受けないかしら……」と思つて、上眼使ひに感謝する時は、實は恐怖なのであります。而も本當は感謝して居乍ら、餘りに強い感謝の形から、恐怖云つた様な事にしか意識されない事もあります。神様等にはさう云ふ氣持が始終あるのであります。隨分神様仲の好い人がありまして、一寸立寄つたなんで着流しで「お變りないか」と言つて神様を拜んで來る人があります。これなぎ、神様と非常に仲の好い方であります。「色々御厄介になつたが、咳が治つたのもあなたのお蔭か……」と言つてお辭儀をして來るのであります。が、非常に深くなつて來ます。恐怖云つた方がいい様になる。

それが、どう云ふ時に恐怖か云ふ事は、これは分解的に考へて見る必要があると思ふのであります。これは非常に細

かい事になりますけれども次の様な話になる。

今朝皆様は色々な漬物を食べてお出でになつたであります。——こゝに一つ理窟を差上げようと思ふのであります。理窟で漬けて見ます。そこらの細かい味が分れて来ます。それは斯う云ふ様に言へるんぢやないかと思ふのであります。

自分云ふものを萎縮しますが、我云ふものは小さくなりますけれども、さう、謙遜云ひますか——へり下る氣持で相手との關係に居りますけれども、然し乍ら自分云ふものが全くなくなつて了ふ云ふ言葉が足りませぬが、全くなくなつて了ふ様なその狀態ぢやなくつて、我^ガを縮めて、我云ふものを縮少させる事に於て實は最も自分云ふものが強く生きて来る場合、この場合が感謝になるんではないかと斯う思ふのであります。恐れる云ふ方は、自分自體が萎縮する共に全部自分がなくなつて了ふのであります。ですから恐怖の結果は氣絶して了ひます。見る見る顔が青くなつて、威張つて居つたのが段々縮んで來ます。そして氣絶して倒れつちまふ。感謝で氣絶するなんて云ふ事は滅多になからうと思ふのであります。有難さにぶつ倒れる云ふ事は滅多にない。又、そんなぢや私は感謝云ふ事へないと思ふ。更にこれを他の言葉で言へば、感謝云ふ時には何所迄も私なら私が感謝して居なければ意味をなさぬ。誰が考へても有難い事で御座いまして、その有難さの前には私も何もあつたものぢや御座いません。誰が感謝して居るが分りませぬが、唯これ感謝、云つたのでは……。

私のところに時々物を下さる方がある。——皆さんに督促する譯ぢやありませんけれども——その時に、差出人の名が書いてない云ふ、御禮の御挨拶も出来ませぬ。又、感謝の意が通りませぬ。中には「誠に下らぬもので御座いますから名を書いて上げる程でない」と仰言の方があるかも知れませぬが、然し感謝云ふには、此方が何所迄も主にして來なればならない。感謝が天から降つて來たなんて云ふ事は考へられないのです。

恐怖の方は、あゝ怖かつた、あゝ實に恐ろしかつたと云ふ時に、比較を言ふものぢやありません。「俺が怖かつた」と云ふ中は、そんなに怖くなかったのです。「わたし本當に怖かつたのよ。だからわたし、扇で顔をかくしたの」と云ふのは、餘程自分が残つて居るのであります。恥しいと云ふ時には、その間の様なところに居りますので、恥しい時にはこの邊に斯うやつて居る（扇で顔をかくす）感謝の時にこんな事をして感謝するのは、意味が通りませぬ。感謝は、自分が感謝する。恐怖は、潰れる程、氣絶する程、自分がなくなるのであります。詰り自我の中の色々本能的な方面がなくなりまして、その人格的自我もなくなつて了ふ場合と、本能的自我は縮少して、人格的自我……自分と云ふものは却つて残つて居るといふ場合と二つに分ける。感謝とは、その人格的の残つて居る場合であると思ふのであります。斯う言ふと、理窟は何方だつていゝやと皆様は或は仰言るかも知れませぬが、一體宗教經驗と云ふものは、人類の歴史的發展に於きましては本能的な要素が非常に強く與つて居るものであります。さうして、自然宗教と云ふ様なものに於ては、本能的な要素が非常に強かつたのであります。今日私達が本能を持つて生きて居ります限り、その意味の宗教的な、あの野蠻人原始人がやつたと同じ意味に於て、宗教的な性も私達にありますけれども、我々が今日宗教と言ふ所の高等なる人間活動は、人格的なものでなければならぬ事は言ふ迄もないであります。私は近來澤山世の中に起ります宗教なんと云ふものが——これを、類似宗教或は疑似宗教と言ひます。——犬の道と猫の道と色々あります。その犬の道と猫の道と云つた類似宗教、斯う云ふものが何故下等なものであるかと云ふ時に、私は人間性として一應認めます。本能的の氣持から其方に行く事は充分認めますが、人性格が足りないのであります。神様はぎんなんにお辭儀をして来るものであつても、人格的に聽いてくれるのでなければ、或はその宗教が人格を養つて行くのでなければ、人格が主になつて出るか少くも人格の涵養成長に意義あるものでなければ本當の宗教とは言へないのであります。

そこで、さう云ふ意味から人格性の少い恐怖云ふ様な事で宗教を肯定して行く事は私は本當でない感ずる。恐怖よく似て居ります。何所迄も人格的である云ふ事が特質である所の感謝云ふものを以て、宗教の一重要要素にするのは、宗教それ自身の人格性に基くからであります。唯恐れ入つて了ふ場合は人格を破壊して居るから本當の感謝云ふへな云ふ事になる譯であります。

そこでその意味からしまして、感謝の方を養ふ方の事はこれはまあ暫く後のことに譲りますが、子供の恐怖心を高め強めて行く事に依つて、宗教的な教養が出来る云ふ、相當親しく、相當廣く存在して居りまするあの空念を、私はしつかり取去り度いと思ふのであります。私は神様ちやありませぬから知りませぬけれども、私達でさへも、必ず自分の側に來る人が人格を失つて来る云ふ事に就ては、私に頼る事に依つてその人の人格がなくなつて来る云ふ事は堪へ難きものであります。況してや、神様がそんな事を望まれる筈はないのでありますから、そこでの小さい子供の心中に出て来る恐怖を——これは實際問題でありますから、御注意頂きますが——恐怖として無暗に壓迫して了へと申すのぢやない。

これは、恐怖云ふ本能性の取扱ひ方をどうするか云ふ事は別の問題で、身心の健全なる發達にも關係が出て来る事であります。それが暫く別で、此所では問題を極限しまして、子供の恐怖を育てる事に依て宗教を取扱つて行かう、これは絶対に避け度いと思ふのであります。雷様が鳴る、ゴロゴロ鳴る、子供が青くなつて居る、そこでその機會に於て宗教的なものを養はう云つた様な態度は、これは閻魔様が園長である幼稚園がなんかでやる事であります。他ではやらぬ方が宜しいのであります。然し斯う云ふ事はよくあります。「怖いのよ、怖いの」斯う頻りに言ふ。まあ實に澤山の恐怖が、宗教の名に利用されて居る。「そんなことをする云何處で睨まれて居るか知れない。壁に耳あり障子に眼あり」。あんな事をうつかり言ふと、子供は探し廻つて、ラヂオの擴聲器を耳云ふかも知れませぬ。天井に眼がある、節穴がある、

「これは實に外道であります。宗教云ふものはそんな情ないものではありませぬ。神様なん云ふ偉い方が——私、よく知りませぬが——節穴から覗いて監督なさるなんて云ふそんなケチな事はなさらないのです。壁に耳あり障子に眼あり云ふのは、音波が世の中にならうと思つて居た昔の話で、今日は、私が斯う言つて居る音波がちゃんと傳つて居るこを私、確信して居ります。私が部屋の中で話をして居る時に、サイエンスの一寸した法則で、隣ですつかり記録されるこなんか何でもない。神様なんて云ふそんな問題を持つて行がなくたつて——」。

幼稚園ちや、ないでせうけれども、よく家庭なんかがあるのであります。神様や佛様を祭つてある處を暗くして置いて成可く電氣を點けないで薄暗くして置いて「そんなことをするなら來い」と引張つて行つて、佛さんの扉を開けて「ソラ」と言つて赫かす。一週間許り前に差上げたお饅頭に黒が生えてお化の様な顔をして居る。(笑聲)これは成程子供が見ればゾツミします。爾來その子の本當の人格宗教云ふものは、寧ろ抑へつけられてアリふのであります。成立しないものであります。よく子供が言ひます。「どうも私、小さい時にお婆様に斯うされて、どうも非常に怖くて、何だか天地宇宙、實に怖い様な氣がして居た。それが宗教的私の氣分を助けたこそが云ふ子供……さう云ふ事も、人間の複雑なる心理の中に何がどうなるか分りませぬから、正面の理窟で取扱つたからうまく行くのではなく、變則の中に本當のものが湧く事もあるから、一概には言へませぬが、若しその子供がその感性の中で、自分でも穿鑿出來ない様な問題を別にして、唯自分で自分を考へて見ましたならば、恐らくや實に馬鹿々々しくなつて来ると思ふのであります。幼兒だつて既に馬鹿々々しくなつて居ります。「お前、嘘をついたから」。白狀しない云ふこの水天宮様のお札を呑ませる。若し嘘をついて居れば血を吐く。さあお呑み——。丁度子供は咽喉が乾いて居りまして「一緒に水もくるか」と言つて呑もうとした大事件であります。今度は「呑ましゃや駄目だよ々々々々々」あれは、呑まして了つたら大人の方で心配して居る。そこは

實にうまく行つて居るのであります。水天宮様を私、説明するんぢやないんですけれども、それを呑まして、さうして神様は嘘を言つた者でも俺の手に掛つたら嘘を言つたものでない事にして下さる方なんでありますから、私は水天宮様の護符を迷信なさゝは簡単に片付けませぬ。實にえらいものだと思ふ。水天宮様の所に連れて行けば、人間は裁判道具にして、呑ませたり呑ませられたりしますが、神様の方では何方にしてもケロリとして居るのであります。呑みさへすれば無罪になる護符なのであります。あの護符は實にえらいものだと思ふ。

この間京都に参りまして、何處かに、蟲のおこつた子供を連れて行く神様がありました。さうして其處に教養のあるお母さんが子供を連れて行つた。さう云ふお母さんは、蟲がおこつてジリ～して居る子供……さう云ふ、子供に瘤が起つて居る時には、親にも瘤が起つて居るに違ないのであります。そこで、親子の縁が切れる様な凄まじき事になつて居る。それを、バスに乗り電車に乗り、京の町外れ、お籠に乗つてなだらかな斜面を通つて森に行つて、半日人里離れた處で親子で會つて居れば、先づ親の瘤が納まります。親の瘤が納まれば子供の瘤も歸りには大體治ります。實によく出來て居ると思ふのであります。

ですから私は、本質的には色々迷信的に脅しつける様なやり方でも、實は却々面白いものだと思ひますが、此處で話しそれは斯うですけれども、それが分つて居てやつたのぢやおかしいし、やれもしませぬ。「よく出來て居るもんだ、嘘をついてもつかぬでも血なんか吐きはせぬ。兎に角呑んで見ろ」云ふ事は成立しない話ですから、どうしてもあゝ云ふ事は恐怖に懼へる宗教になるのであります。この手は絶対に使はない様にしたいと思ふのであります。

そこで私は、宗教的心理的根本が恐怖である云ふ考へ方を、學問的理論で云々する事は、どうでもいいしまして、さう云ふ根據のもとに恐怖を濫用される事を非常に惧れるのであります。而も我國等は、原始宗教の形態に於て、澤山殘

つて居ります。私は、宗教家が私達に言ふ言葉の中に、神様云ふものを、まるで自分より駄目なものに引下げて居る。神は癪持にましく、機嫌買ひにましく、なんて云ふ事を言つて居る。キリスト教の舊約聖書にも、神の心持を色々に言つて居つて、新約では少しも言つて居ないのであります。新約——所謂キリスト教の神様は、お怒りになる事はないのであります。舊約のエホバだけが怒るのであります。その區別を、私達はハツキリつけ度いと思ふ。

幼稚園で、あの柔かい氣持の子供を脅かす事は、一體全體よくない事であります。然し他の場合に於て、たうせ不完全なるあの本能で露出して来る子供に、本能でぶつかつて行かうとする時に、多少の脅かしも、恐れ云ふ様な心理を利用する事も、絶対にいかぬと言へませぬ。先生も、時に怖い顔をしてお見せになるのもいゝ。さうして子供に恐怖を起させ、あの、本能で擴がらうとする氣持を一寸萎縮させる云ふ事は、手段としてはさう絶対に禁止すべきではなからうと思ひます。それで、それが宗教教育に利用されて来る云ふ考へ方は、絶対にいかぬと思ふのであります。

こゝで私は、宗教性が、教養性云ふものと關係がある云ふ考を、ぴつたり禁じて了ひました。それは恐怖には似て居るけれども、何處迄も人格の根本を失はない。人格でやつて行くこゝ即ち感謝云ふ事に歸著する斯う云ふ風に見て行き度いと思ふのであります。

そこで、恐怖性を本體としないで、何處迄も感謝云ふ事を本體として、宗教の態度を養つて行かうとする、その感謝云ふ事は宗教の本質である。自分云ふものを小さくする云ふ経験に即する事であります。而も恐怖の如く、人格迄没却して了ふものでなく、人格は何處迄も主體になるのである云ふ事になります。

道徳に就きましても、感謝をよく感ずる人は、人格の内容の大なる、しつかりした人だと言ひ得るのであります。感

謝性の少い人は、寧ろ人格的に小さい人だと言はれる位に考へます。さう云ふ事を先程申上げましたが、もう一つ感謝性の事に就て落してなりませぬ事は、この感謝云ふ様な事は、今は宗教に依て行く心的要素として研究致しましたが、感謝云ふ事は實はその人格的云ふ意味に於て含まれて居ります如く、實に人間的經驗の特質を非常に豊かに豊富に持つて居るものであります。恐怖云ふ事は、何方から言ひましても、人格が働いて居りませぬし、恐らく恐怖の対象になりますものは、これは人間性云は言へなくて、多分化物性云ふ様な事が多い云ふのであります。人間が恐怖の対象になる云ふ事は、もうその対象になつた時にその人の人間性がヘンテコなのであります。皆さんの中には、子供達が私を恐れて居る、と威張つていらつしやる方があるかも知れませぬが、その時は少し怪物性を帶びて居るのであります。怪物でありまして人間ではないのであります。そんな事を言つてどんなに力が出るかウン！なきゝ言ふのは怪物の恰好であります。人間の恰好ではないのであります。感謝される云ふ対象は、これは何處迄も人間的なのであります。

そこで、宗教云ふものは勿論超人間的なものを持つて居りますが、子供にその日常の生活經驗の中で宗教的教育をして行かうとする時には、いきなり、神様を人間から別なものとして與へて行く云ふ丈では、機會も少いし、幼児には分り難いのであります。さうする云ふものが怪物になつて了ふのであります。そこで、神様は人間ぢやありませんね。宗教は人間的だけのものがや決してありませぬけれども、人間的な生活經驗の教養から、宗教教育の方へ繋つて行く道が云ふ事は最も自然であり、健全なる結果を生ずるものである云ふのであります。その意味で感謝云ふ事を本體に致しまする時に、詰り対象を人間的に見て行きますから、その人間的に見て行く神の繋りは、佛様云ふものを知るまい、佛様云ふものを知るまいけれども、丁度私の様なもんだよ」と斯う仰言つて下されば宜しいので

あります。私云ふのは皆さんの事であります。私の様なもの云ふ子供は眼を見開いて「あらまあ、そんなにモダンな方?」と仰言るかも知れませぬが(笑聲)そのモダンであるかどうかは別にして、或は「いやよ、神様なんか、そんなに太つてない」と仰言るかも知れませぬがそれも別として——兎に角、神様は私の様なもんだ——私は神様の様だと言つては少し失禮です。いくら大人が聞いて居なくても滅多にそんな事は言ふものぢやありません。幼稚園の先生は、大人が聞いて居ないから云つて勝手な事を時々言ふ様ではありますけれども、斯う云ふ事は言はない方が宜しい。——けれども、神様が私の様だ云ふのは宜しいのであります。詰り、私の様だ云ふのは、私プラス云ふ事です。私は神様マイナスである云ふのは、されだけ引いて居るが分りませぬ。マイナスアルファ云ふのはないのであります。この、私の様だ云ふのは、何處か云へば、詰り人間的感謝の対象、そことの關係であります。即ち人間的關係の教養が、宗教教養に直ぐに自然になつて行く云ふ意味に於きまして、この感謝性云ふものも生きて來るかと思ふのであります。

更に斯う云ふ事を私は考へる。感謝云ふのは、勿論實際經驗云しましては、對象云ふ様な事に於て感謝するのであります。あなたに、あの件に就て感謝するのであります。この人に、この件に就て感謝するのであります。誰にだか分らぬが、何だか分らぬが、兎に角感謝するなん云ふ、そんなあでやのないこではない筈であります。然し乍ら茲で考へ度い事は、この感謝性云ふ様な事は、その感謝性のその實行はさうであります。斯う云ふ事が心持の中に浸込んで來ます。何云なき、所謂感謝に用意せられたる心持云つた様な狀態に、性格がなるのであります。人格がなるのであります。ボテンシャルサンクス云ひませうか……潛在感謝、所謂あの電器の中に蓄めてあります電池はボテンシャルであります。別に今電氣云してビチヘー働いて居るのではないが、直ぐにその狀態になつて居りますが、人間の生活の中に、この感謝云ふものが、蓄電器に蓄へられたる如く蓄へられる状態になるのであります。

朝、よく寝た後！甚だ尾縄な話であります、腸内が（町内——近所）云ふ譯ではありませぬ。おだやかであります。よく寝て居りますから、ハツキリして居る。天氣は好し、風はよし、何だかいゝ心持になる。それは感謝を云ふ形……ハツキリ意識して居りませぬが、ボテンシヤルサンクスであります。一寸やるこ直ぐ感謝になるのであります。私は、他人の所に物を持つて行つたりするのは、朝早く持つて行きます。さうするごとく紙屑一枚持つて行つても感謝する。向ふが疲れ切つて、感謝は何れ明日（云ふ時に持つて行く）却々出ませぬ。さう云ふまあボテンシヤルの状態、これが、朝に限らず、その人のキャラクター全體になつて、始終ボテンシヤルサンクスで歩いて居る人があります。ニヤ／＼笑つて歩いて居る人があります。私は、人間を見るごとく直ぐ調べる。空の電池（カラ）這入つて居る電池。空は役に立ちませぬ。空の電池（カラ）云ふのは、よく／＼の事をしなければ嬉しさに行かぬ人であります。一觸即發の状態になつて居ない。一觸即發（云ふ）は甚だ危険な状態であります、さうだと思ふ。これも、他の事で一觸即發では困る。一寸側に行くごとく直ぐ戀愛性一觸即發（云ふ）は非常に困るけれども。（笑聲）感謝の方で斯う云ふキャラクターになつて居りますごとく、感謝すべき対象があつて感謝する順序ですけれども、かるが故に感謝する（云ふ）理窟があつて感謝するんですけれども、純人間心理的問題になる（云ふ）は、感謝性がこつちにある（云ふ）その感謝性から感謝の対象を探し出すのであります。そんな事は、お若い方の澤山いらっしゃる處で言ふのはどうか（云ふ）思ひますが、意識するご意識しない（云ふ）に拘らず、始終聾探（云ふ）のは、若さんのボテンシヤリティであります。その意味で始終感謝の対象を探して居る人がある。敵に會ひ度い（云ふ）は敵討だけの話です。敵討で世界を廻つて居る人は私は大嫌ひであります。非常に厄介千萬な事を、好んでして居る（云ふ）所が、お禮廻りで、何處かにお禮の恩人はなからうか（云ふ）巡禮して居る人を見る（云ふ）大好きです。人生を巡禮（云ふ）で渡る人（云ふ）敵討で渡る人（云ふ）大變な違です。（云ふ）の間も京都に行きました、非常に好い景色を見ました。此處を通る（云ふ）、「彼處で宮本武蔵が（云ふ）した（云ふ）か（云ふ）」

ふ處だから行かう」と言ふがら、断つた。それよりもお寺の横の方を通つて巡禮に歩いて居る人の通りすがりでも見る方が
みんなにいゝが云ふ。この巡禮心の小ささのを養ふのであります。小巡禮——四國なんかには小巡禮が居ますが、あれ
はよくないが、心持では小巡禮と云ふものはいゝ。チビ巡禮……實にいゝ。さうしてこの小巡禮は、何も笈擢を背負つて、
自分を捨てたお母さんを探しに、阿波の鳴門の悲しい感謝ぢやない。幼稚園に毎日來ます。心身を健全に發達せしめられ、
善良なる性情を涵養されて、宗教教育の本當の感謝性の指導が與へられて、恐怖性でなく感謝性が與へられて居る子供で
す。私は、先生と子供が、朝幼稚園の門でお早うを言つて居る時に、時計を見るところ成程遅くないけれども、大變に違つた
氣持で言つて居る事を聞く事があります。子供の方では「お早う／＼」……巡禮の挨拶。先生の方では「お早う」……これが
ら厄介——(笑聲)——。大變な違であります。その所謂小巡禮の氣持で世の中を渡らせる様にして置けば、感謝を何處か
で探すのであります。その對象が、みんないゝ對象に巡り合ふか。或は猫だらうか犬だらうか、これは宗教教育の中の別
個の問題であります。妙くも幼兒教育のところで、その對象を拜ませよう、感謝させよう云ふ事は、却々難しいのであ
ります。

これは色々の事で行きます。勿論本當に正しき感謝への對象に行く様に指導する心掛は小學教育等でも非常に必要であ
りますが、こゝで兎に角、みんないゝ對象を後にになつて與へ、みんなよい對象を出して來ました所で、感謝性のボテンシ
ヤリティーが小さい時から養はれて居なければ、その觀音様にはつがないのであります。さうして、折角の觀音様に、又
態々お禮に行つたりする。或は、觀音様たつて怖いかなと思つて見たり、全く違つた事になるのであります。ですから私
は、全體的ボテンシヤリティーを養つて行く意味に於て、感謝と云ふもの獨特の、相手を段々競り上げて來て、何處かに
持つて來たい。——恐れ度いなんて云ふ人はなからうと思ひます。恐れが慢性になりますと、神經衰弱になる。臆病者に

なる。さうして臓病になり神經衰弱になり、恐怖症になつた時に、恐怖の対象を探して居る者はない。怖いもの見たさう云ふ事もある様ですが、あの怖い親爺に會はぬ様に逃げて隠れて居る心理であります。

所が感謝の方は、恐怖全く違つて、相手を探す迄は落著かぬであります。私は心の感謝の一一杯になつた對象を見付け、直ぐに終つて行くその温かい淋しさ、その明るい物足らなさ、そんなものを人間性の中によく見るのであります。そこの迄相手を探すのであります。何處かに宗教を建設せずに居られなくなつて來るのであります。感謝性が、如何に宗教の要素として重大なものであるかと云ふ事が申し得ると思ひます。この意味で私は、感謝性と云ふものを、非常に重要なものと考へるのであります。心身を健全に發達せしめられ、善良なる性情を涵養されて居れば、こゝに行きませう。餘り身體が弱いと、性情が善良でハリキリボーキの様な事には行きませぬ。きつこ感謝性に行きませうけれども、それだけで私が物足りないのは、人類文化としてのあの大きい宗教と云ふものがある。

そこで話を今迄の元のところに結びつけて、子供が往來で神様にお辭儀をして居る人の姿を見て特殊なる感情を持つ。「何だか人がお鳥居の處でベコ～やつたぜ」。ベコ～やるのは、お鳥居の前でも焼芋屋の前でもやつて居るのであります。その姿が特殊なる感激を起すのは、子供が、まだお鳥居の中に何があるか知らぬのです。自分の對象とはまた知り得ないのですけれども、その一般的疑問的感謝性と云ふものがある。何所かにそれを持つて行き度いと思ふ。それが、それをやつて居る人を見て、特別な感じを持つのであります。だからその經驗と云ふものが重大な事になる。その重大と云ふ意味は——私はこゝで、幼児が持てる物と云ふ事を二つに分けて、家庭なり社會なりの宗教教示、宗教事實から與へられて来るものと、子供の心の中に心理的に湧出すものと、二つに分けてお話致しますが、人間性は社會に生きて居り、文化と云ふものは社會に存するものである。その文化と云ふものと結びついて、始めて個人的心理的經驗が實體化して来るこ

云ふ意味に於きました。こゝでは、その二つは一つでなくなつて來るのであります。若しも子供が、唯家庭なり社會なりに於きましたして、人がやつて居る宗教經驗を見まして、一種の興味として持つて來るだけならば、これはそれだけの話であります。けれどもそれは他の場合と違つて「先生、今日はね、往來を歩いて居たら水蜜桃があつた、今日は大きなメロンがあつた、その前を、たまらない氣持で通つた。彼處の横丁でね、柳の蔭でをぢさんがアイスクリームを食べて居た。それを見乍ら來た、食べたいな」と言ふ。これを私達はそんなに一々取上げなくても宜しいかも知れませぬ。これは、何故取上げなくていいかと言へば、その子自體がどうである云ふのでなく、それは子供の食慾と本能と結んで居る事に過ぎないから、そんなに取上げなくても宜しいのであります。けれども今の宗教的經驗の場合に於きましたは、本能と結びついて來た偶然的興味ではなく、その所謂人格的問題として繋りがあるのでありますから、苟くも宗教經驗に關するものを子供が齎した時に於ては、それは通りすがりの偶然の社會的環境の影響と見るアイスクリームだの何だのと一緒にすべきでない云ふ事が考へられて來るかと思ふのであります。この意味に於て、これを非常に重大であると私達は考へて來るのであります。

斯う云ふ意味で宗教教育の問題を分解して、その一つであります感謝性、これが主でありますから、この爲に大變時間を費しました次第であります。

幼児の心に、宗教そのものとしての纏りのついたものが、まだ缺かれて居る譯ではありません。然し乍ら斯う云ふ點を正しく養成して置けば、それは自ら綜合して、宗教的態度の方に向けて行くものである云ふ意味でその主なる要素を探して見ました所が、第一は感謝性ではないかと云ふ事になつたのであります。

どうも、相當の立派な宗教でありますても、何か極端に申しますならば、願ふとか頼むとか、詰り得るところあらうと

して行く心持が強く動いて居るものであります、人間は自分の力の弱さを感じました時に、さう云ふ心持になります事は止むを得ない……と言ひますか、全く當然の事でありませうけれども、然しその求める、要求する云ふ様な事だけが強く勝ちます云ふ事、或はそこから迷信云ふ様なものが起つて來るのではないか、斯うも考へられます。迷信とはさう云ふものであるか云ふ事をハツキリ言ふ事は非常に難しい事であります、或は、詰らない、信ずるに足りない対象を信する云ふ事が、迷信の大きな特質でもあります。けれども然し、宗教的なる態度云ふ方から、健全なる態度、不健全なる態度、その不健全なる態度が迷信云ふ風に考へて行く事しますれば、唯この、何か要求する云ふ様な心持だけで、尠くも其方が非常に主になつて居ります場合は、健全なる宗教的態度とは言へないかと思ふ。

それならば、詰り人間性の餘り高等な部分から出て居る事ぢやないのであります、苦しい時の神頼みであるとか、或は死にかけてそれから宗教に行くとか、或は色々御利益で奨められて行くとか、言ひ換へれば慾がもとにになつて起つて来る場合は専くも高等なる心から出て居ると言へませぬ。世間に澤山あります所の所謂迷信、或はこの頃謂ふ所の疑似宗教即ちインチキ宗教云ふものは、大抵その氣持が主になつて居るぢやないかと思ふのであります。これに對しまして、もとより人間でありますから色々お力を借り度い、頼り度いけれども、然し乍ら先づ何となき、宇宙自然絶対に對する感謝の心が先に湧いて居りまして、その感謝の心で宗教的生活に入つて來る。その上で色々御厄介になり度い。勿論人間の事でありますから慾も出て來ますが、然しそれは寧ろ感謝して居る上の話であります、その慾を與へられて、それで有難い云つた様な事では本當の宗教的態度と言へないかと思ふのであります。

(以下次號文責在記者)